

名あり、その方とは前日、九段会館で直接話し合い、すべて了承頂いたと報告し、改めて郵送された議案全部について賛否を諮ったところ、全員一致可決されました。

会長から追加議案として、広報活動強化のため、井上武彦委員を幹事に選任したいと提案し、全員之れに同意し可決。同氏から就任のあいさつがありました。

予定の議事を終え、会長から、米海兵隊員スウリック氏がルオットの戦場で拾得した日本軍人の写真十三枚を寄贈下さった経緯を説明し、写真は会場に掲示してあるのでルオット関係者は是非見て欲しいと要請されました。

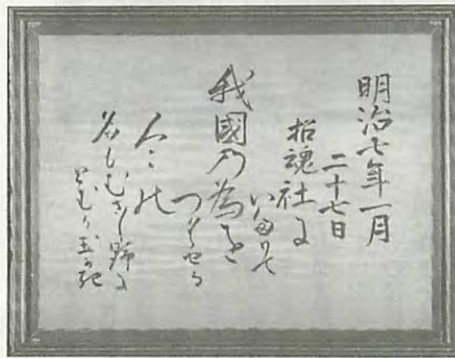
また、靖國神社のご厚意で、会員富田ミツさん奉納の花嫁人形が本日特別に展示されていること、又、会員東地井義訓さん奉納の写真「戦争を知らない子供たち」も掲示されているとの報告があり、入場券が配られました。



修祓

慰 靈 祭

十時半、若い神官に導かれ、みたらして心身を清め、拜殿に参入してお祓いを受けてご本殿に昇りました。「神社略誌」によりますと、このご本殿は明治二年に東京招魂社仮殿として造られ、明治五年に今のようにつくり直され、平成元年に御創建当時の姿そのままに大修築がおこなわれました。尚、御社号を、靖國神社と改められたのは明治十二年のことです。御本殿の裏に靈璽簿奉安殿があり、御祭神二百四十六



明治天皇御製

万余柱のお名前を墨書した靈璽簿が納められております。

献饌、奏楽の間、フト頭を挙げると、上壇の間の欄間に写真で見覚えの明治天皇の「招魂社にいたりて」の御宸筆が燦然と輝いております。

本殿参入



明治七年一月二十七日

招魂社にいたりて

我國の為をつくせる人々の

名もむさし野に

とむる玉かき

雄渾にして格調高い御筆あとに靖國神社の濫觴を思い一段と身の引き締るを覚えました。

祭主（小田彌宣）の祝詞奏上につづ

いて会長の祭文奏上は、一言一句皆私共の思いをそのままに語りかけられ、往時を憶い万感胸に溢れる感が致しました。そして今更乍ら平和の有り難さをかみしめました。

玉串奉奠は佐藤会長、大給相談役、

妻の木村久子様、弟の岡野正之様、妹の石川きみ様、子の井上武彦様、甥の菅井一仁様の七名が代表して奉仕し、一同これに合わせて二礼二拍手一礼、黙禱して、亡き御霊を偲びました。本殿から退下し、御神酒を頂き、来年もお詣りすることを誓いました。

直 会

靖國神社から九段会館までの道路は満開の桜にさそわれた人たちが大そう混雑していました。直会は、九段会館地階の桜の間で黒川副会長の進行で始められ、佐藤会長の挨拶、乾杯の発声に唱和し杯をあげました。会長から、直会は大嘗祭、新嘗祭を範とする重要な意義をもつ神事で、神と人、人と人との直り合いの場であると解説がありました。

九段会館心づくしの松花堂弁当で舌鼓をうち、やがて、神奈川県志田富雄（号富岳）様の詩吟「九段の桜」は今日の日に最も相応しく、満場深い感銘をうけました。

ひきつづいて「青い山脈」「麦と兵隊」等々なつかしい歌が次々と披露され大いに盛り上がりました。

ハワイから篤志会員の徳原徳子様に参加され、旧知の人々と挨拶を交わされ、海軍中政会代表菅岐春記様は、航空隊で係わりのあつた御祭神の遺族達に声をかけておられました。

神戸の土井厚二様は八月にも再度

マーシャルの墓参をしたいと、同行者を募ってりましたが、賛同者があつたようです。

いわき市の鵜沼久義様は、埼玉県の吉田 誠様(会友)に「父は昭福丸に乗船中ウオツゼ海面で米潜に墜沈され戦死した」と云うと「私の居たウオツゼ島に「昭福丸戦死者之碑」がある」と教えてくれ、図面などの資料を贈る約束をしておりました。

鵜沼様は、平成八年に日本遺族会主催の「遺児による慰霊友好親善」旅行のマーシャル班に参加し、精密な報告書を作って関係者に配布しました。私も拝見しましたが御熱意に敬服しました。

西宮市の尾上一郎様は昭和十八年十月まで、平穏なルオット島に滞在していたので、当時の様子等何なりとお尋ね下さいと云いましたら、早速神戸の土井様が申し込まれました。又、尾上様は御自身が所属していた第十四魚雷調整班の遺族を探していると申されました。

今年の直会には意識して参加者のお話に耳を傾けました。はなしたいこと、聞きたいことのある方が予想以上に沢山居られると感じました。直会のあり方について会員の意見を求める方法は、などと考えているうちおひらきの時刻になり、お互いに来年を約して散会いたしました。

第34期決算報告書 (自平成9年1月1日 至平成9年12月31日)

第35期一般会計予算

マーシャル方面遺族会

(自平成10年1月1日 至平成10年12月31日)

1 一般会計収支計算書

2 一般会計財産目録 (平成9年12月31日現在)

<収入の部>

科 目	金 額
前期より繰越	5,416,826
会 費	1,087,040
寄 付 金	1,297,320
受 取 利 息	58,694
雑 収 入	69,100
(小 計)	(2,512,154)
合 計	7,928,980

資 産 の 部		負 債 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
現 金	64,600		
普通預金	74,696		
郵便振替	31,650		
通知預金	300,000		
金銭信託	3,551		
定期預金	4,802,132	次期へ繰越	5,276,629
合 計	5,276,629	合 計	5,276,629

<収入の部>

科 目	金 額
前期より繰越	5,276,629
会 費	1,000,000
寄 付 金	1,200,000
受 取 利 息	50,000
雑 収 入	100,000
(小 計)	(2,350,000)
合 計	7,626,629

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	469,597
運 営 費	522,877
事 務 所 費	622,500
広 報 費	561,925
印 刷 費	41,921
通 信 費	164,013
消 耗 品 費	79,200
会 議 費	112,682
送 金 諸 費	33,775
公 租 公 課	10,271
雑 費	33,590
(小 計)	(2,652,351)
次 期 へ 繰 越	5,276,629
合 計	7,928,980

3 特別会計 (現地慰霊碑維持基金勘定)

収 入 の 部		支 出 の 部	
前期より繰越	7,500,000		
		次期へ繰越	7,500,000
合 計	7,500,000	合 計	7,500,000

(注) 定額貯金及び貸付信託として保管。

監査の結果上記の報告は適正且つ正確であることを認めます。

平成10年 2 月 22 日

監 事 高 橋 鎮 夫 ㊟

同 佐 竹 エ ス ㊟

会 長 佐 藤 宗 丕 ㊟

<支出の部>

科 目	金 額
慰 霊 費	500,000
運 営 費	600,000
賃 借 料	630,000
広 報 費	565,000
名 簿 作 成 費	1,750,000
合 本 作 成 費	70,000
印 刷 費	42,000
通 信 費	170,000
事 務 所 費	80,000
会 議 費	120,000
送 金 諸 費	35,000
公 租 公 課	10,000
雑 費	35,000
(小 計)	(4,607,000)
次 期 へ 繰 越	3,019,629
合 計	7,626,629



海の中の武器

Ⅱ 戦没艦船の現状 Ⅱ

ルオットの節子・クローングさんから標題のような本が寄贈されました。クエゼリン環礁に沈んでいる日本軍の艦船の現状を、米国人ダイバー、マークス・S・ミラー氏が自らの目によって描いた貴重な記録で、写真も各船毎に掲載されており、船名がはっきりしているのは次のとおりです。

秋葉山丸・朝風丸・建武丸・永興丸・生田丸・昭栄丸・口60潜水艦・立山丸・長興丸・第6昭南丸・第7拓南丸・第11富士丸・だいさん丸・他特務駆潜艇等です。

右の和訳文を用意しましたので、御希望の方には船名を指定頂ければコピーを送りますが、その実費は請求させて頂きますので、予め御了承下さい。

(担当井上幹事)

玉碎のルオットから

五十四年ぶりに

還つてきた遺影

厚生省主催の慰霊団一行三十八名が今年三月八日から十五日まで、マーシャル、ギルバート方面の慰霊巡拝を行いました。

五月十日朝マジロ空港出発。第一班(クエゼリン、ルオット二十名、厚生省職員二名、小田急トラベル社員一名)は約一時間後、第一の目的地クエ

ゼリンに着きました。空港にはおなじみの報道官マリアンヌ・レインさんと英子・ラポイントさんがお迎え下さいました。早速バスで日本人墓地に向い、真心をこめてお参りました。

島内を一通り御案内頂いてから、午後四時頃一行は英子さんのお宅のパーティーに招かれ、お心づくしのちらしなどを御馳走になりましたがこのとき、英子さんから、食品検査士のパトリック・ズリックさんを紹介されました。

パトリックさんのお父さん、アンドリュ・ズリックさんが海兵隊写真班としてルオットにいたとき(十九年二月三日頃か?)戦場で日本兵のひどくこわれた緑色のトランクを拾い、あけてみると、日本兵の写真十三枚が入っており、近くに二人の日本人の遺体があったそうです。以後この写真を日本の遺族に返したいものと、転勤の度に持ち歩いて尋ねたが思いを果たせないまま半世紀を経過しました。昨年から

子息のパトリックさんがクエゼリン勤務となり、ここは日本の遺族が度々来ると聞いたので、写真を息子に送り、父に代わって、遺族に返すことを頼んだとのこと。このことを知った英子さんの取計いで、今日のパーティーになったのです。

パーティーの場に居た団員には写真の中に心当りの者がなかったため、パトリックさんは英子さんの助言で写真の処理を本会に委任され、山森久江さ

んが御預かりしてきました。

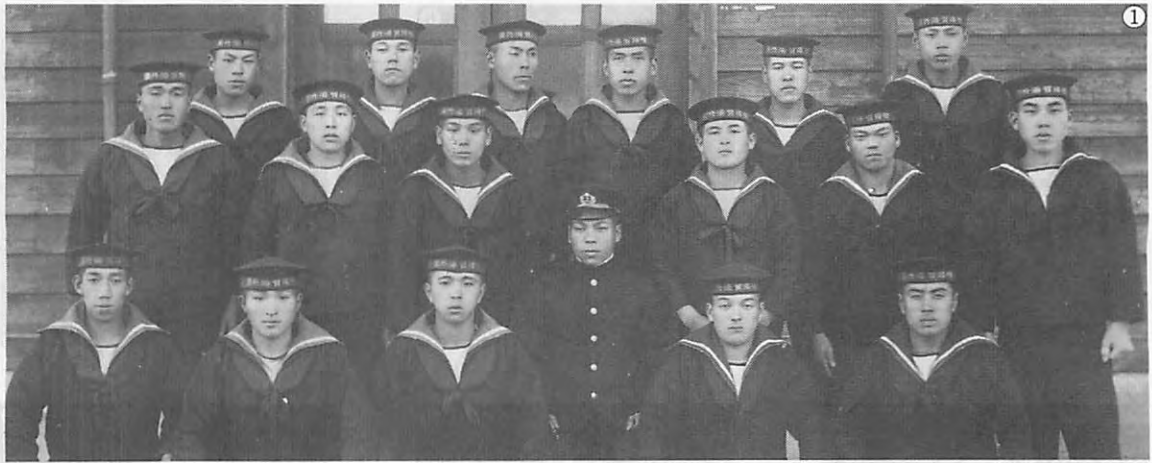
この写真は「戦場の遺留品」として厚生省が鋭意調査中であり、当会としても情報を集めて協力したいと思えますので、次頁以降の写真の人物に御存知の方がおりましたら、その方(又は縁故者)の住所氏名、電話などを本会にお知らせ下さい。

当会では複製品を保管しておりますので写真を見たい方にはコピーをお送りします。写真のNoとその氏名及び関係等を詳しく書いて、お申越し下さい。一日も早く御本人又は御縁故の方々にお届けできるように御協力を切に願っています。

四月二十七日に、英子さんからクエゼリンの日刊紙四月十四日付の「アワグラス」が届けられました。

日本の慰霊団が慰霊碑の前で慰霊祭をしている有様や、コッテル司令官のお姿のほか、英子さんがお宅に慰霊団を招いて夕食パーティーをしたこと、そのときパトリックさんが、お父さんから預かった写真を慰霊団員に手渡している写真などが、拾得された人物写真を主体に二頁にわたって詳しく掲載されておりました。又、英子さんが、過去七年間慰霊団のお世話をされたことなどが紹介され編集者の好意が感じられる紙面です。

御希望の方にはこの新聞のコピーを、お送りします。



①

☆写真No.1の裏に「昭和十八年二月十一日、海兵団にて入団記念」と記されており、昭和十八年一月横須賀第二海兵団の整備科に入団したうちの二コ教班でNo.3も同一人です。
 ※は不鮮明な文字を示します。

- 北海道 佐々木信彦
 長谷川太一 佐藤 茂
 秋田県 櫻田 誠司
 福島県 大野清太郎
 茨城県 大川 義人
 栃木県 渡辺 恒雄
 群馬県 松波 熊雄
 千葉県 大木 重治
 東京都 大塚 成吉
 谷口 寛治 曾根 栄一
 神奈川県 小川 正博
 山梨県 三井 熊雄
 長野県 小山 積治
 静岡県 塚田 正
 安間 定男
 (御遺族がわかりました。16頁参照)

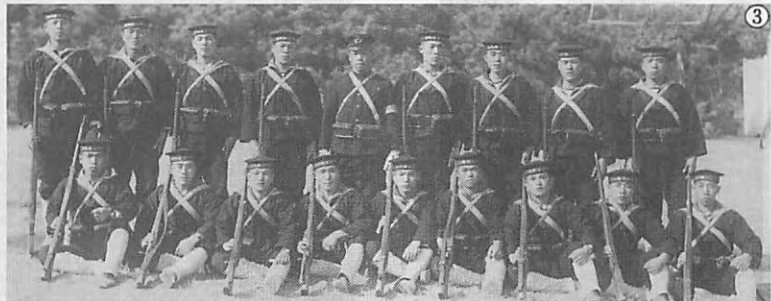
教班長 古矢與四郎
 ☆No.3の裏に「昭和拾八年三月辻堂野外教練ニテ、第十三教班一同」と記されています。
 ☆No.8の裏に「海軍少将勝野 實」と記され、横須賀第二海兵団長でした。昭和三十二年八月に逝去されており、御遺族がわかりました。16頁参照



②



④



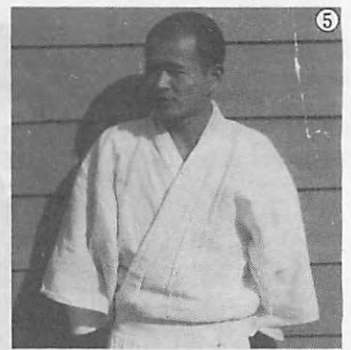
③



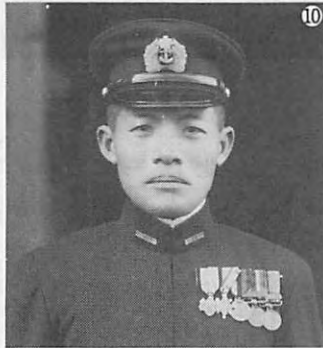
⑦



⑥



⑤



⑩



⑨



⑧



⑪

☆No.9の裏に「海軍中尉佐々木龍治」と記され、海兵団では分隊長であったと思われれます。昭和十九年には郡山航空隊教官兼分隊長でした。

☆No.10の裏に「海軍兵曹長天野稲光」と記され、海兵団では分隊長であったと思われれます。

☆No.13の裏に次の記入があります。

「入団前写す
青木 玄一 大野清太郎
三國 秀雄 長谷川欣一郎」

②④⑤⑥⑦⑪⑫には記名はありません。



⑬



⑫

マーシャル諸島慰霊巡拝記

第一班 村上 清隆

平成十年三月八日、厚生省主催マーシャル、ギルバート諸島慰霊団一行は成田空港を出発した。

一班はクエゼリン、イバイ、ルオットの二〇名、二班はウオツゼ、マロエラップ、ブラウンの八名、三班はタラワ、マキンの一〇名のほか厚生省から平野幸生団長以下五名の編成で、添乗員は小田原トラベルサービスの三名であった。

一行はグアムに一泊し、翌九日夕刻マジユロ到着、山口雄平さんたちの出迎えをうけた。翌十日午前八時我々一班はマジユロ空港からクエゼリンに向う。群青色の海はクエゼリン環礁近くになると、鮮やかな淡いブルーとなつて底まで透き通って美しい。永年の夢が叶えられて胸の高鳴りを覚える。

クエゼリン空港で、レイン報道官と英子・ラポイントさんに迎えられ宿舎に案内される。午後一時バスで日本人墓地に赴き、それぞれが故郷から持参したお供物を供え、国旗を掲げ、厚生省職員の用意した花輪を飾り、コットレル司令官、レインさん、英子さん、イバイのサムソンベルーさん御夫妻も参列されて一同黙祷を捧げた。

高知県の上田和昭さんは神職の服装で祝詞を奏上された。

中央はコットレル司令官



それよりバスで島内を案内して頂き、戦のあとを見学し、午後四時、バスで英子さんのお宅のパーティに赴く。☆編集者註。パーティの様子など、他の記述と重複するものは割愛しました。

十一日朝九時二十分、船でイバイ

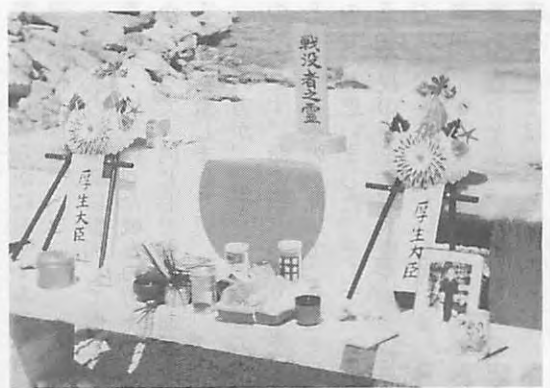
(エビゼ) 慰霊に出発。途中、日本軍八十名が守っていたというカールセル島を眺めて進むと、米潜の攻撃で沈められた龍神丸がスクリューを空に向けて痛々しい姿を曝していた。

船に近づき、花束を捧げ、船を一周してお別れをする。

☆編集者註。(財) 日本殉職船員顕彰会の資料に次の記述がある由。(昭和十九年二月六日クエゼリン海域で、第三龍神丸戦没。殉職者は船長木村 栄 治兵衛(宮城県) ほか)



カールセル島と龍神丸



十時イバイ着、バスで移動し、南の岬に即製の祭壇を設け、国旗を掲げ、お供えをし、香をたき黙祷をする。

猫の額程の小さなこの島で、海軍九五二航空隊と第四施設部の計八百名が玉砕したと聞き、悲慘さを思い暗然となる。

港で遊んでいた子供たちにサンドウィッチなどを与えると着ていたシャツをぬいで包み、喜んで帰って行った。

三月十二日午後一時、ルオット空港でタラップを降りようとしたら、地上から「福岡の村上さん」と若い女性の声にびつくり！ その方は節子・クーロンクさんで、佐藤会長さんから私の来ることを知らされていたとのこと。

同郷のありがたさで、すぐ博多弁で打ちとけた話ができました。

お迎えのバスと御主人リチャードさんの車に分乗して休憩所に行き、節子さん手作りのお寿司や漬物、御主人が水を入れて下さったジュースやお茶を頂き小休止の後、墓地に行きました。リチャードさんが踏み石の黒くなったのはがしてペンキを塗りかえ、芝刈りや樹木の手入れもして下さったそうです。

皆さんが家から持参したお供物を供え、香をたき、代表の追悼の言葉のあと、一人ひとり拝礼しました。御夫妻の案内で司令部などを拝見しました。飛行機満席のため、次の便を待つ間、リチャードさんの事務所で見ませて頂き、写真などを見せて頂きました。三月十三日、マジユロの東太平洋戦没者の碑前で慰霊団全員集合して合同追悼式が行われ、マーシャル諸島共和国内務大臣、同国駐在日本代理大使三枝篤夫御夫妻のほか日系の方々も参列しました。

平野団長の追悼の言葉のあと全員が献花し、御冥福をお祈りしました。十九時からのお別れパーティには鉦太鼓入り、腰蓑姿の若い男女の踊りに南洋情緒を満喫しました。

十四日マジユロ空港で島の人々のお見送りをうけ、グアムを経由十五日成田帰着、大任を果し安堵いたしました。現地の皆様の御親切な計らいと厚生省の職員、添乗員の御配慮に厚く御礼申しあげます。

エニウエトック (ブラウン)

慰霊の旅

神奈川県 穴戸献吉郎

厚生省主催第八回マーシャル・ギルバート諸島慰霊巡拝団は、三月七日(土)成田ビューホテルで結団式と説明会を行い、翌八日(日)出発、途中グアムで一泊して九日(月)夕刻マジユロに着いた。



私達二班八名(マロエラupp一名、ウオツゼ三名、エニウエトック三名、ミレー一名)は翌十日(火)マロエラupp及びウオツゼを慰霊巡拝し、十一日(水)マジユロ環礁を船で一週し船上慰霊をした。ミレーには行けないので最も近いマジユロの海岸で慰霊祭を行った。又マジユロ島内を一周し、みやげ店、博物館を廻った。

十二日(木)マジユロ八時四十分発、双発機でクエゼリン経由十二時三十分広々としたコンクリート滑走路のエニウエトックへ着陸した。島民や子供達が大勢来ていた。三十分位酋長らしい人と話した後、現地のスクールバスと

軽自動車で島の北端に向かった。島は椰子の木が多いがマジユロに比較するとかなり低く、きれいに並んでいた。北端の海岸の近くの台地で雑草や枯枝を取り除き巡拝団が持参した祭壇を設け、厚生大臣の花輪を両脇に、故人が好んだ菓子、煙草、酒等々を供え後の木の枝に国旗を掲げささやかながらも心のこもった祭壇となった。

祭壇は日本に一番近い処で日本に向かって設けられた。平野団長の発声で一同黙祷を捧げた後夫々拝礼し、最後に班員の女性がお経をあげた。後片づけした後、三名が花を海へ流した。

私は昭和十七年に北支へ出征したため戦死した弟とは五十六年振りの現地再会となった。懐かしい昔の思い出がよみがえり涙がにじみ現地慰霊が遅れたことを詫言った。亡き両親や兄弟妹の様子などもくわしく報告した。

国のための立派な戦死であり、家族一同は誇りに思い靖國神社に祀られ国民に敬愛され、いつ迄も尊崇されているので心静かな安らかな御冥福を祈りました。帰路、体育館で婦人達四、五十人が楽しそうにバレーボールをしているのが見えました。

島の子供たちは明るくて人なつっこく、人口は約三百人とのことで原爆の灰の影響が若干あるらしい。生活はアメリカの補償があり、コンクリートの平家建がかなりあった。明るく平和な南の島の楽園のようだった。

翌十三日(金)は在マーシャル三枝代理大使夫妻及びマーシャル諸島共和国の内務大臣臨席のもとに東太平洋戦没者の碑で合同追悼式を行ない十四日(土)マジユロ発グアム一泊後十五日(日)全員無事帰国した。

厚生省の平野団長及び職員、小田急トラベルサービスの添乗員の親切、丁寧な指導により充分な慰霊巡拝ができたことを諸英霊と共に深く感謝しています。ただエニウエトックに慰霊碑のないのが残念でした。

私は耳が不自由のため不便なこともあったが八十歳の高齢でありながら何とかお供が出来たのは偏に同行の皆様のおかげでした、ありがとうございます。

エビゼ(イバイ)の思い出

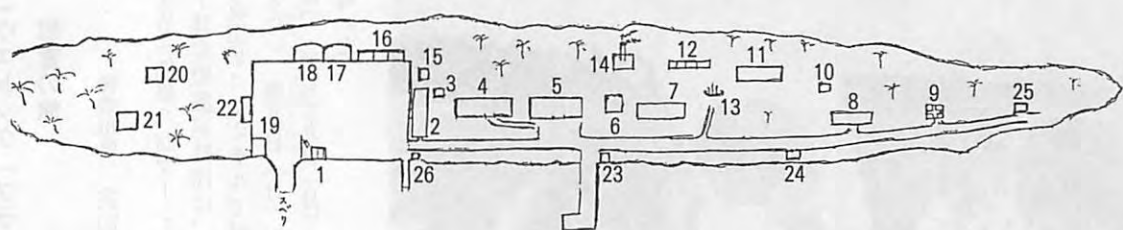
会友 高田源次郎

私は十八年九月から十八年十二月まで、エビゼ島に居りました。

図の左の方20と21の近くに冷蔵庫があり、航空食のミルク、卵でアイスクリームを作った楽しい思い出があります。1と26の間に13mm機銃が三丁あり、初めて来襲してきたグラマン四機のうち一機を撃墜しました。

26の近くに小屋を作り、豚を飼育していました。この鶏は何所でも自由に歩き廻り、捕まえようとすると屋根から椰子の上まで飛び上がりました。

太平洋(外海) マーシャル群島クエゼリン環礁エビゼ島 第952航空隊見取図



武智秀一氏 往時を偲び昭和22年頃作成 全長570m 幅70m

九五二空 見取図案内

- | | | | |
|----|---------|----|-------|
| 1 | 飛行指揮所 | 13 | 風呂場 |
| 2 | 落下傘整備場 | 14 | 炊事場 |
| 3 | (後搭乗員室) | 15 | 写真室 |
| 4 | 機銃室 | 16 | 工作室 |
| 5 | 士官室 | 17 | 工納庫 |
| 6 | 電話交換室 | 18 | 格納庫 |
| 7 | 一兵舎 | 19 | 整備員控室 |
| 8 | 三兵舎 | 20 | 弾薬庫 |
| 9 | 病室 | 21 | 火薬庫 |
| 10 | 便所 | 22 | 設営隊宿舎 |
| 11 | 二兵舎 | 23 | 見張所 |
| 12 | (搭乗員室) | 24 | 酒保倉庫 |
| 13 | 各科倉庫 | 25 | 氣象観測 |
| 14 | | 26 | 防空壕 |

徳原徳子さん

ハワイから一時帰国

篤志会員徳原徳子さんは平成八年七月に、ラスベガスで御主人勇様に先だたれ、昨年二月に永年住み馴れたハワイに単身で戻られました。

この度久しぶりに母国日本を訪れ四月五日の本会の慰霊祭当日、九段会館での直会に臨席下さり旧知の方々との挨拶を交わされました。四月八日には会の有志の方々が横浜の珠江飯店にお招きして、つもる話に花が咲き時のたつのも忘れませんでした。

徳原さん御夫妻のクエゼリンでの生活は長く昭和四十二年に当会の現地調



前列中央は徳原様

査員(故浮田会長と、現佐竹監事)が南方各島を歴訪したとき以来親身も及ばぬ御協力を頂き、又、四十三年のクエゼリンの慰霊碑建立の際は、日本人の同島入域が許されていなかったため碑の資材一切と仕様書を船便で送り、整地、組立作業のすべてを御夫妻が中心となつて、各国のボランティアの協力を頂いて、あのように見事に完成されたのです。その後の墓苑の維持管理についても御協力を頂きました。(徳原様の郵便の宛先と電話は次のとおりです)

Mrs. Tokuko Tokuhara
1039Kekaulike St. A402
Honolulu, HI96817
U.S.A.

千鳥ヶ淵戦没者墓苑拝礼式

厳かに挙行（五月二十五日）

新たに二千三百三十二柱を納骨

厚生省が主催する本年度の拝礼式は、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を仰ぎ、五月二十五日、厳粛盛大に行われた。

この日、前夜来の雨も漸く上がり墓苑の新緑が一段と映える中、墓前には天皇皇后両陛下から御下賜された大花籠が飾られ、式場には遺族、遺骨収集協力者、関係団体代表等が席を埋め、やや緊張した雰囲気の中で式の開始を待っていた。

やがて内閣総理大臣代理ほかの来賓も席に着き、秋篠宮同妃両殿下が定刻少し前に式場に御臨場になられた。

式典は、定刻十一時に開始され、先ず全員起立して、皇宮警察本部音楽隊の演奏する「君が代」に合わせて国歌を斉唱した後、原田厚生政務次官が、国会審議のため止むを得ず欠席された小泉厚生大臣の式辞を代読された。

この後、納骨の儀が執り行われ、遺族等参列者が見守る中、御遺骨が厚生省辻審議官から政務次官に手渡され、次官はこれを奉持して地下の納骨室に安置されて、納骨の儀は終了した。

納骨の儀の後、両殿下は墓前にお進みになり、深々と御拝礼をされた。参列者一同も両殿下の御拝礼と同時に拝礼をして、御拝礼の後式場を御退場の

両殿下をお見送りした。この後献花に移り、内閣総理大臣、厚生大臣、外務大臣、防衛庁長官、環境庁長官の各代理、遺骨収集地域関係各国駐日大使、各政党代表、衆議院厚生委員長、参議院国民福祉委員長、日本遺族会会長、遺族代表の献花があり、最後に千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会会長代理が締めくくりの献花拝礼を行った。式典は十一時四五分、岩谷社会・援護局長が閉会



式典に参列した本会の代表

の辞を述べられ滞りなく終了した。この日、納骨された御遺骨は、旧ソ連、フィリピン、ソロモン諸島、モンゴル、硫黄島等から収集された二三三三柱で、今回の御遺骨を合わせて墓苑に納められている御遺骨は三四万四二二二柱となった。（奉仕会会報より転載）

ギルバート諸島から 御遺骨帰還

厚生省主催のキリバス共和国遺骨収集が昨年に引き続き実施された。

二月七日に日本を出国した遺骨収集団（団長森田登審査室長のほか職員遠藤豊二氏、藤井津如氏、日本遺族会の中山仁司氏）は十日キリバスのタラワ島に到着した。政府機関と打合せを終え、十三日にプタリタリ班は上空から飛行機を捜索し又現地の協力者により海中を調査したが得るものはなかった。

宿舎に戻ると島の役場に日本人戦没者の御遺骨が保管されているという情報が入り、早速受領に向かう。ダンボール箱の中に大腿骨数本と、頭蓋骨の他、小骨片が沢山納められていた。これは、米国の慈善騎士団一四六旗部隊というリーフ調査隊が、昨年沿岸調査を実施した際にウキアンガンで発見し、同役場に預けた御遺骨であった。

受領した御遺骨は白布に包み白木の箱に入れ直し宿舎の部屋に安置した。二月十五日 マキンの調査日程の最終日、午前中を提供情報のあった場所に赴き、確認作業に当たる。ウキアンガンでは民家の庭先の、地中から御遺骨が見つかった。かつて、同家人が畑をつくろうと庭先を開墾した際に、あまりの人骨の量に開墾を諦め、御遺骨を埋め戻したとのことである。とりあえず二柱を収骨し後は次回の機会に託すこととし、後ろ髪を引かれる思いで島を後にした。

タラワ班は、二月十三日に環礁北端のプアリキ島に渡り、昨年試掘し確認した供養塔の敷地内から十柱を収骨した。その他提供された情報に基づき数箇所を調査試掘したが御遺骨は見当りなかった。

二月十八日朝、タラワの富塚氏宅の庭先をお借りして、キリバス共和国政府の保健省職員立ち合いのもと半日をかけて焼骨を行った。

翌十九日、同国より遺骨証明書の発行を受け、二十日には団員一同は御遺骨の納められた箱を抱いてキリバス共和国を出国、翌二十一日在フィジー日本大使館で封印と遺骨証明書の発行をうけ二十三日午後、団員一同は御遺骨と共に成田空港に到着。

十四柱の御英霊は半世紀を経てやっと、懐かしい祖国、日本に念願の帰還を果すことが出来た。

（日本遺族会の資料より抜粋）

戦地より愛児へ

海軍軍属 白井定之命

昭和十九年二月六日
マーシャル群島クエゼリンにて戦死
東京都大田区中央出身 三十五歳

恒宏君、勝年君、元気ですか、楽しい夏休みが来ましたね。お休みだからって朝ねぼうしてはいけませんよ。朝は早く起きて夜は早くねませうね。お父さんは元気で朝は僕達がねてるうちに起きて一生けんめいお仕事をしています。…………お母さんの言ふことをきかなかつたり、つやちゃんといけんくわしたりしてはだめですよ。僕達の良いことも悪いこともみんなお母ちゃんから知れますよ。良くやつてゐるとお父さんがかへるときにとても僕達がびつくりするおみやげをたくさんもつて行きます。家が新しいのですからおへやなどよこさず自分の勉強室は二人で良くおさうじすることですよ。

お母さんにお願ひして下田のおちいさんの所へつれていつてもらひなさい。そして海へ入って、まつくろになるのです。ちやうぶになります。お父さんはまつくろです。だからとても元気です。ちやうぶでなくては、大きくなつてりつばな兵隊さんになれませんよ。恒宏君はちき中学へ行くのですからよくその勉強をして今からよういしておくのですよ。

戦争はこれからもつとつと長くつづきます。二人が大人になるまでつづきますよ。…………毎日あつちからキャンデーやなま水などはあまりのまないこと、夜はねびえをしないやうにしないさい。では又このつきに手紙を出します。僕達もてがみを下さい。まつてゐます。 さやうなら

恒宏君
勝年君

父より

【昭和四十八年二月靖國神社頭掲示】

「ぎずな」

東京都 白井 勝年

平成九年四月五日、マーシャル方面遺族会の慰霊祭が催される靖國神社の境内の桜は、雨に濡れながらも満開。敷きつめられた玉砂利が輝いていました。数多く出席した慰霊祭ですが、車椅子で母親を連れて来たのは初めてでした。そして、一番心に残る昇殿参拝になりました。奇しくも、父に胸の中で最後の語りかけをし、慰霊祭の終わるのを本当に待っていたかの様に、母親は同年四月二十二日桜の散り始めに合わせる如く享年八十九の天寿を全うしました。

年始めの行事として、毎年元日の靖國神社への初詣。境内の山崎写真屋さんに家族全員で撮って頂いた記念写真も何時しか三十有余枚となり、一枚一枚が家族の成長の過程を映し、御社の正面扉の菊の御紋章を背景に家族の歴史を伝える貴重な思い出となつていきます。

何年前からか慰霊祭が行われるのが四月の陽気の良い季節となり、従来の二月の厳しい寒さとは異なり、桜も満開でお花見も出来るし、遺族会の人達ともお話も出来る、母も大変喜び靖國神社に参拝するのを心待ちにしていました。

私達兄弟を都立九段高等学校へ進学

させたのも、父との結び付きを忘れさせない様に考えての事だったそうです。父、そして靖國神社と聞いて思い出すのは、昭和十九年六月頃、中学校から帰った私に大事な話があるからと、緊張した顔で母が前置きも無しに突然「お父さんが戦死して、神様になったよ。」と話しかけたのでした。悲しみより先に「えっ神様に？」と母に問いかけ、涙を隠すように外へ駆け出していったことです。

戦争が激しくなり疎開先の伊豆下田も空襲による戦禍も出始め、神国日本・神風特攻隊・軍神・神様等の文字が紙面に躍り、電波で流され、僕らも何時かは軍人になって日本の為に役に立つんだと、心の中で強い思いを抱いていました。だから父の戦死に対しては、悲しむ事より神になった父に尊敬の気持ちで湧いてきていました。

戦後になって父親の手紙を見せられ、遠く南方から家族に宛てた思いが、それは明日の行く先さえわからない戦場から祖国に残した家族への断腸の思いが胸に響いてきました。

平和になった今読み返しても、私は決して真似する事が出来ない、真の父親像を見る事が出来ません。

この手紙は私の宝物です。母の葬儀の祭壇に飾った遺影は、四月五日の慰霊祭で遊就館の前の桜の下で撮ったものでした。

(16頁につづく)

雪の育たぬ匂ひかな

— 自句自解 —

会友 蒼生 横山 文吉

天守閣踏まえし影のあめんぼう

私の育った新潟県の新発田市（その頃は町）の方言では「あめんぼう」のことを「甘辛塩辛」と呼んでいた。この「あまからしおから」を掴まえて生きたまま呑み込むと泳ぎが上達すると信じられていた。確かに焦げ臭いような甘さと舌を刺すような辛さの残る奇妙な味がした事を今も覚えている。しかもこの虫を呑むことの出来る子供は勇者とされたし、又自分でも呑んだ瞬間から泳ぎがうまくなったと確信したものである。

越後新発田十万石の城は平城であつて「あやめ城」又は「浮舟城」とも謂われ、今は天守閣こそ無くなつてゐるが、それに匹敵する二層の隅櫓が重要文化財に指定され深蒼な水に影をおとす白壁の隅櫓の荘厳さと重厚さは、立派に天守閣の偉容を物語っている。

深蒼な水に影をおとす白壁の隅櫓の荘厳さと重厚さは、ここに佇ずみ六十五六年前の腕白時代を回顧することによつて、むしろ外様藩主溝口家の衰頹を感じるのである。

無数の「あめんぼう」がああ長い六肢を張つて忍者の如く巧みに城閣の影を踏み自らがさざ波となつて泳いでいる。

秋の雲裾より乱れ寒の神

三浦半島が一番高い山が大楠山である。標高二四二米だからそう高いと言ふ程ではないが、山頂の展望台からは三浦半島の全容はおろか千葉の房総半島・遠く富士箱根、伊豆までが手にとるように一望でき、言わば箱庭の真ん中にあるような山である。

然しながらこの近郊に住む私たちは、出来得る限り昔の「けもの径」などを探索しながら、地藏尊や道祖神（塞の神）、三猿塚に思わぬところだめぐり逢ふことに散歩の意義を見出そうとしている。ときたま鬱蒼とした樹木の間から見える青空に女の肌のようにふくよかな秋の浮雲が、ゆっくり崩れながら流れて行くさまを見るとときこそ俳人真利に尽きるのである。

燈台の白のまぶしき芋嵐

昭和五十七年、観音崎で出来た一句である。燈台の白に折からの秋風に煽られた里芋の葉うらの白さが一瞬の交叉となつて眼底に刻み込まれ眩しさと解していただきたい。

鬼がわら月得て彫を深くせり

中秋の名月ではなかつたが、この夜些か酒気を帯びて帰宅におよぶ自分には、折から魔除けの鬼がわらに真向から差す皓々たる月光と、それとの反射によつて生ずる凹凸の陰影はさながら生きものののように酔眼を驚かし、そしていつもながら居眠りながらも自分の帰宅を待つていて呉れる老婆の顔がよぎつたのである。

蜻蛉の翅透く風のありにけり

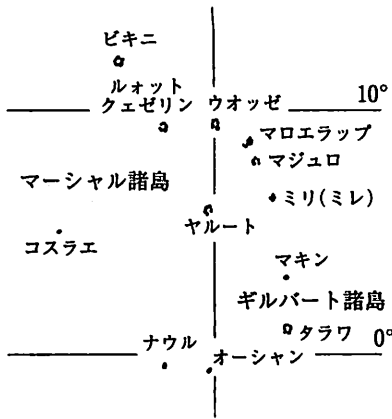
わが家の小さな庭にそれに見合つた小さな池がある。
ある日、折よくこれまた小柄な、むぎわらとんぼが盛んに水面を叩いては往還しながら卵を生みつけている。こんな小さな生きものにも子孫を残すための尊い営みを眼の当たりに見せられた。
早速部屋の上から句帳と鉛筆を持つてくることを忘れなかつた。

半島に雪の育たぬ匂ひかな

雪深い新潟育ちの自分が海軍復員後、四季を通じて気候温暖にして風光明媚な三浦半島の一角に定住出来たことを幸運と思つてゐる。

例年ならば、二・三月頃の春先の降雪が半島の気候であつたのだが平成二年一月のように一足早く降つたのは珍しい現象であつた。

いずれにせよ折角降つて呉れたのだから、これを二・三日降り続けておれば私達北国の子供の頃のように三浦半島の童達も、雪だるまや「かまくら」などを作つて正月を樂しむのだからと想いをめぐらしていたら、ふと「雪の育たぬ」という言葉が口を衝いて出た。半島の地熱によつて急速に蒸発し昇天してゆこうとするときの「新雪の匂ひ」でなければならぬ、「半島に雪の育たぬ匂ひかな」となつた。やがて半島中に生まれ育まれていたすべての樹木、見知らぬ草花、そして小さな生きもの達がこの瞬間的な雪解水を吸つて尊い生命の息吹を感じとつた自然がそこにあつたのである。



☆参加を申し込まれた方は直ちに本部
にお知らせ下さい。

- 1 巡拝地域
- A班 (マーシャル諸島) マジュロ、マロエラップ、ウォッゼ、ルオット、クェゼリン B班 (ギルバート諸島) マキン、タラワ
- 2 時期 平成十年十月十一日(日) 十月十八日(日)(七泊八日)
- 3 人員 各班ともに十五人
- 4 申込締切 十年八月十日
- 5 申込先 参加者が居住する都道府県 遺族会(連合会)
- 6 経費 一人に付十万円
- 7 条件 一人に付十万円

厚生省委託 日本遺族会主催
戦没者の遺児による
慰霊友好親善事業

右地域の戦没者の遺児であり、かつ過去に本事業及び政府主催による慰霊巡拝に参加したことのない方に限る。

名 簿 訂 正

◎ 平成 3 年 8 月 15 日 発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏 名>	<訂 正 事 項>
21	南 よ し	〒070-0831 旭川市旭町1条9丁目2635 ☎0166-52-3289 戦歿者上田國夫 続柄妹 所属部隊3132 戦歿年月日19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン島<新入会>
23	高 橋 覚 治	〒025-0135 花巻市栃内27-26 ☎0198-29-2087 戦歿者高橋 勇 続柄長男 所属部隊第3特根 戦歿年月日18. 11. 25 戦歿地 ギルバート<新入会>
24	藤 田 英 正	〒981-1954 仙台市青葉区川平3-47-8 ☎0222-27-3325 戦歿者藤田 正 続柄長男 所属部隊南東空廠 戦歿年月日19. 2. 6 戦歿地 ルオット<新入会>
26	小 野 敏 子	〒960-8032 福島市陣場町6-9 ☎0245-34-2919 戦歿者蓬田正俊 続柄長女 所属部隊第3文九 戦歿年月日19. 2. 6 戦歿地 クェゼリン島<新入会>
27	大 熊 正 美	大熊さと子が継承
28	小 林 昌 進	〒324-0602 栃木県那須郡馬頭町大字大山山下郷1399 ☎0287-93-0434 戦歿者小林竹治 続柄弟 戦歿年月日19. 2. 6 <新入会>
30	小 野 リ エ	小野博孝が継承
32	小 川 清	〒260-0801 千葉市中央区仁戸名町682-67 サンテール千葉2-2506 ☎0432-26-7596 戦歿者大谷幸男 続柄弟 所属部隊東部24 戦歿年月日19. 2. 24 戦歿地 ブラウン<新入会>
32	横 山 カホル	〒335-0022 戸田市上戸田2-28-7 ☎0484-43-2776 戦歿者黒崎善吉 続柄長女 戦歿年月日19. 3. 28 戦歿地 ウォッゼ<新入会>
33	腰 川 妙 子	〒270-1327 印西市大森5271に変更
33	芝 崎 俊 子	〒270-0092 松戸市松戸1358に変更
36	毛 塚 通 弘	〒158-0083 世田谷区奥沢1-3-3 ☎03-3729-4431 戦歿者毛塚 融 続柄弟 所属満洲部隊981 戦歿年月日19. 2. 24 戦歿地 ブラウン<新入会>
37	斉 藤 幸 江	斉藤美美が継承 続柄二女
37	白 井 まさ子	白井勝年が継承 ☎03-3771-2059 続柄二男
43	斉 藤 則 男	斉藤サキが継承 続柄妹
47	藤 田 ヨ リ	☎025-223-6065
47	藤 田 正 勝	〒956-0861 新津市北上1-24-9 ☎0250-24-2199 戦歿者藤田 正 続柄次男 所属部隊南東空廠 戦歿年月日19. 2. 6 戦歿地 ルオット<新入会>
56	田 村 竜 美	〒600-0000 京都市下京区七条御所内北町5-3に変更
57	植 野 八重子	〒598-0008 泉佐野市松風台2-12-1に変更
58	枝 光 剛 郎	〒654-0036 神戸市須磨区南町1-2-13-501 ☎078-731-0359に変更
61	植 田 敏 裕	〒739-1754 広島市安佐北区小河原町甲511-4に変更
64	門 田 登美子	〒799-2303 愛媛県越智郡菊間町蔵の谷に変更
68	金 子 庄之助	〒848-0101 伊万里市波多津町辻448-7 ☎0955-25-1040 北九州市より転居
69	中 野 フヂエ	〒853-0201 長崎県南松浦郡富江町富江郷642 ☎0959-86-0750 堺市より転居
78	横 山 文 吉	〒238-0032 横須賀市平作5-24-11 ☎0468-52-1428 会友 新入会 海南島
78	吉 田 誠	〒340-0056 草加市新栄町1000-3-3-401 ☎0489-41-1047 会友 新入会 ウォッゼ

寄付者芳名

(敬称略・順不同)

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため
浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

北海道	岩川 あい	稲毛 三郎	宮本 豊吉	米田 正子	東京	青木 利一	秋元 輝夫	飯島浩一郎	内海 静枝	石谷 典夫	岩浪 邦江	内海 静枝	黒川 誠	吉田 綾	渡辺 三三	市川 市郎	吉松 貞子	橋本マサエ	村上 清隆	高知	石元 利親	田中 百合	徳弘 萩子	野島 貞人	馬場 常	福岡	青山アヤ子	家迫 政雄	小林 繁幹	橋本マサエ	村上 清隆	吉松 貞子	金子庄之助	金子 茂	佐賀	賀 貞子	坂本 トセ	松永タツ子	草場 マキ	坂本 トセ	松永タツ子	山田 雪子	安達シツヨ	板浦 重雄	長崎	克己	中野フヂエ	林 文枝	前田	フサ	森 テル子	山下 タエ	熊本	植田 静夫	片山 玲子	鬼海 富夫	北村 権蔵	塚野ヨシ子	土田 利子	村上佳寿子	大分	木村二三夫	宮崎	山内 キク	鹿兒島	川畑ツルエ	出花 利文	野平 ヨネ	村上 ノキ	沖繩	宮城 幸子	以上は、平成九年十二月一日から十 年五月三十一日までに寄付された二五 四名でその合計金額は、百二十二万七 千七十五円です。
-----	-------	-------	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	------	----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	----	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	----	----	-------	------	----	----	-------	-------	----	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	----	-------	----	-------	-----	-------	-------	-------	-------	----	-------	--

(12頁よりつづく)

桜の下で微笑んだ母の顔には、もうすぐ五十四年振りに夫と再会できる喜びが溢れている様に感じられました。神様になった父と仏となった母が、大森池上本門寺の白井家の墓と一緒に、仲良く天国より見守ってくれていることでしょう。

一軒の家で神様と仏様に敬いの心を忘れずに守る事がたいせつなのだ、子孫に伝えていきたいものです。

クエゼリンの兄を偲んで

東京都 山森 久江

兄、山本敏雄が佐世保海兵団に入団したのは、昭和十八年一月十日の小雪の降る寒い日でした。私が六歳のときです。兄は自分が居なくなったら母が大変だろうと云って入団前日まで凍りついた田んぼを、手足を真赤にしながら耕して行きました。

兄が入団してからは我が家は灯の消えたようでした。

靖国神社を崇敬しお護りする

奉賛会に入会しましょう

護国の英霊の鎮ります靖国神社の末永き御安泰のために、御祭神に最も身近かな私どもは全員が奉賛会に入会しましょう

兄は気だてがやさしく、私を可愛いがってくれました。模範青年として表彰されたこともあり、誰からも慕われておりました。兄の戦死公報が届き、家中が悲しみに包まれました。

母の嘆きは如何ばかりかと思いましたが、兄はまだ二十二歳の若さでした。男三人女六人の子供をもった父母は子育てが大変だったと思います。母は兄が戦死してから七年後に他界しあとは父一人で育ててくれましたが、八十四歳で亡くなりました。

私は昭和六十一年八月に長年の念願が叶い厚生省主催のクエゼリンの墓参に参加させて頂きました。今年四度目の墓参に参加して三月十日に英子・ラポイントさんのパーティに招かれ、パトリックさんから、お父さんが、ルオットで拾われた日本軍人の写真を見せられました。

入団記念写真のウラに「昭和十八年二月十一日海兵団にて写す」と書いてありました。この人々も私の兄と全く同じ日に入団し、訓練をうけていたのです。

貴重な写真十三枚を私に託されて、日本に持ち帰る大役を果すことのできたのも機縁と思えました。パーティのとき東京の遺族宮崎邦子さんのピアノ伴奏で「ふるさと」や「海ゆかば」をみんなで合唱したとき、兄のことを思い出し涙が溢れて声がつまりました。

幼きに 別れし兄の面影を 幾度たずねる クエゼリンの島

本部だより

☆ルオットから選ってきた遺影について心当たりのある方は写真の№と氏名などをお知らせ下さい。

五月二十三日、(財)水交会の資料によって写真⑧の勝野 實少将の長男勝野源太郎様と連絡がとれました。勝野少将は昭和三十二年に逝去され、令夫人も他界されました。

六月十四日、東京海交会と静岡県西部海交会の御協力により写真①の中の故安間(あんま) 定男様の妹さん山田美奈子様と連絡が取れました。

☆会員名簿を作製中です。お届けできるのは十月中と予定しております。☆「環礁」合併本は注文した方に九月中にお送りする予定です。

☆所属部隊不明の方について調査を依頼しておりますが、件数が多いため日数がかかるようです。回答あり次第「環礁」に掲載いたしますのでお待ち下さい。

☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」を、同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身の周りのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に

対する率直な注文など何なりとお寄せください。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承ください。

☆入会のおすすめ
本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報「環礁」をお届けしております。

マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦没者の親族ならば誰でも、又、御一柱に何名でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友としてご参加頂いております。会員、会友とも会費は一ヶ年二千元で入会金は要りません。

☆事務局よりおねがい
一、会への送金は原則として「郵便振替」を利用ください。申出でない限り領収書は発行しませんので郵便局の受領証を保存してください。

二、本部への電話は月曜日から金曜日までの午前十時から午後四時までにお願いいたします。
三、FAX番号が〇三三三六六一一八七六〇番に変わりました。

本部

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町

一八二(泉商事ビル)

マーシャル方面遺族会

電話〇三三三六六一一八七六〇

FAX〇三三三六六一一八七六〇